

〈特集〉

3. 11 とこれから

東日本大震災「3. 11」から2年。みなさんにとって、あの「3. 11」はどんな意味をもっていますか？ 私たちHuRPは、「3. 11」に強い衝撃を受けました。そして、これからの活動の中で「3. 11」一東日本大震災・原発事故に関連する企画を行っていきたいと考えています。HuRP通信3月号では、被災地は今どうなっていて、現在未だ克服されていないこと一被災地の復興の遅れ、脱原発への歩みなど一に対し、何をすべきなのかを再考するため、特集号をお届けします。



仙台の“光のページェント”

【目次】

- ◇ 「3.11 とわたし」 アンケートからみる…2
- ◇ 座談会 「3.11 と、これからのわたし」 …4
- ◇ 「3.11 への視点：文献一覧」 …8
- ◇ 「ボランティアへ赴いた被災地はいま」 …8

HURP通信

2013 年 3 月号
東日本大震災特集 第 79 号

特定非営利活動法人 人権・平和国際情報センター Human Rights and Peace Information Center Japan
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-17-8 丸十ビル 402 号 電話&FAX 03-6914-0085 <http://www.hurp.info/>

「3.11 とわたし」 アンケートからみる

ここでは、HuRP 会員みなさんに、以下の質問を通して東日本大震災の体験とその後の思いや、行動に出たことについて回答いただいたものを紹介します。

●質問●

- ①あなたはどこで 3.11 に遭いましたか。もしくは知りましたか。その時、まず何を思い、感じましたか？
- ②3.11 の後、何をしましたか。（避難／被災地ボランティアなど）
- ③原発事故を受けて、何を考えましたか。また何をしましたか。（脱原発デモ参加など）
- ④東日本大震災から 2 年経過して、「3.11」を経験したからこそ、生まれた気持ち、考えはありますか。また、それはどんなことですか。

【静岡県 N さん「3.11 とわたし」】

①普段の金曜日のように、ラジオを聞きながら、自宅で仕事をしていました。アナウンサーの「関東はいま、激しく揺れています」という言葉の後、震源から 600km 位離れている浜松でもゆっくりとした横揺れが始まった。しかし、その揺れ方はいつもと違って長く、いつまでも終わらない揺れに酔いそうになった。その後、初めて聞く「宮城県北部で震度 7」という言葉の想像できず、気が遠くなった。

②東北再訪の旅行に出かけた。仙台空港そのものは通常のターミナルに戻っていたが、その周辺の海岸付近は、瓦礫こそ無くなっていたが、過去に何が建っていたのか全く分からないほどの更地が広がっていた。旅行過程は、震災の影響を受けなかった。雪のなかの旅人が珍しかったのか、電車で向かいの席に座っていたおばあちゃんが、「これ食べるか」と言って飴



防波壁工事前の浜岡原発



原子力館のキャラクター
“ユウユウ”君

をプレゼントしてくれた。

③浜岡原子力館に 10 年ぶりに出かけた。昔、その大きさに圧倒された原寸大の原子炉の模型も、頑丈で“安全な”はずの建屋のレプリカも、何の説得力もなかった。むしろ、これほど頑丈な建屋を吹っ飛ばしてしまうほどの、水素爆発の破壊力に唖然とした。見物客に「こんなのやってもダメ」と言い返されている原子力館のキャラクター“ユウユウ”君の陽気な姿は、もはや痛々しかった。

④電力消費に敏感になった。必要のないライトはできるだけ消すようにして、家で流しているラジオはできるだけ太陽光でまかなうようにした。秋葉原のパーツ屋でも、太陽電池セルがよく売られるようになったのは、同じことを考えている人が多いからだろうか。あと、消費電力が大きい真空管アンプを使わないで、小電力ですむアンプに切り替えた。

【東京都 T さん「3.11 とわたし」】

① 自宅で実家の母親（岩手県在住）と電話中に。その時の会話…母「揺れてる、揺れてる…結構大きいから外出るよ…」ここから丸 2 日連絡が取れなくなりました。

② 大きな地震自体は結構経験しているので、電話していた時は気にならなかったのですが、電話が切れた直後に東京でも大地震。時間差があってからこの大きさということで、急に心配になりテレビを付けて情報収集しました。盛岡の震度は 5 強。実家は盛岡のすぐ隣町。震度をみるかぎりでは大丈夫そうでしたが、宮古市には親戚が住んでおり、津波の映像を見て今度はそちらのほうが心配になりました。岩手県沿岸はほぼ毎年墓参り等で行っていましたが、子供の頃の海水浴場が宮古市。知らない街ではないところが水に埋まっていく映像は忘れられません。後日連絡がついてから聞いたことですが、父は地震のすぐ翌日に両親の実家（岩泉町）を見た後、沿岸にも行ったそうです。多くは話してもらえませんでした。映像だけでは伝わらない事として臭いがひどかったと言っていました。

③ 果たして今、流されている情報が本当かどうか疑問に思うことが増えました。

④ 連絡がとれないという不安。なんのための携帯電話か、緊急時こそ使いたいものが使えないという現実。あの時電話は使えませんでした。インターネット回線は生きていたので、実家に帰った時に両親に使い方等を教えてきました。

【京都府 O さん「3.11 とわたし」】

① 京都の自宅で勉強中に 3.11 に遭いました。弱い揺れでしたが、長く続いたので気になって地震情報にアクセスしました。情報が流れる中で、とてつもない大地震だということを知りましたが、正直、その段階では余り実感が沸きませんでした。

② 地震情報が流れる中で、津波警報が流れたため、すぐに津波情報を流しているニュース番組を見ました。しばらくすると、ヘリからの中継で平野に押し寄せるとす黒い津波が家や車、空港を飲み込んでいく映像を目にしました。「これが今、この日本で起きていることなのか？」と信じられない気持ちを抱きました。さらに、気仙沼港の映像で「波が押し寄せる」というより「海が迫ってくる」状況や巨大なタンカーが波に乗って港の中に流されてくる様子を目にして、その災害の大きさを実感し、背筋が凍りつきました。

③ 私は元々、原発反対の立場だったため、自分も何か役に立ちたいという気持ちはありました。しかし、正直なところ、当時私は司法試験受験生だったため、目の前にある自分の試験勉強に手一杯だったこと、社会的・経済的に自立できていない立場で脱原発デモや NPO などの活動に参加することまで考える余裕をもてませんでした。

④ 私は関西在住でしたので、厳密な意味では 3.11 を経験し

たとはいえなかったかもしれません。しかし、関西にいたからこそ、客観的に 3.11 を巡る問題をとらえることもできたと思います。3.11 は、尊い犠牲を払いながらも、従来私たちが行政や「専門家」に任せっきりにしてきた電力政策や原発の安全性について、私たち自身の問題として考えるきっかけになりました。しかし、3.11 直後は盛り上がったその意識も、2 年を経て沈静化しつつあります。あくまで私見ですが、その原因の一つは、市民が懸命に論じても、「子どもの論理」として受け入れられないことからの諦め、詰まるところ行政や「専門家」に比べて、市民側に議論の拠り所とする科学、医学、経済などの多角的分野から裏付けられた情報が少なく、また流通してないことにあるように思います。これは、3.11 の問題に限らず、沖縄問題など多くの社会問題でも同様のよう思えます。そのような状況を私ひとりで変えられるとは思いません。しかし、せめてもの行動として HuRP の活動に参加しました。

写真：N さん提供

座談会「3.11 と、これからのわたし」

定例の HuRP 水曜会議で、ふと「メンバーの震災当日について、改めて話したことがなかった」ことに気づいた私たちは、これから HuRP として「3.11」とどのように向きあい活動を位置づけていくのか——そのことを考えるきっかけとして、それぞれの個人的な思いを話し合う座談会を開催することにしました。参加者は 4 人、Web サイト制作の M さん、編集者の T さん、DTP デザイナーの O さん、司会は DTP オペレーターの A です。

A 3.11 を経験して、これからをどう生きようと考えているかを参加者のみなさんに聞いた上で、今後 HuRP の活動につながるような案や予定をこの座談会で得られればと思っています。よろしくお願いします。

◆「2011 年 3 月 11 日」をどう過ごしたか

早速ですが、3.11 から 2 年が経過したわけですが、東日本大震災をみなさんがどういう状況で体験したかをそれぞれ伺うことから始めたいと思います。まず、M さんお願いします。

M はい。震災時は、神保町のオフィスで仕事をしていました。その頃、仕事の関係でちょうど段ボールが山積み状態の中で作業をしていました。地震が起きた当時、まずその段ボールが崩れたのを覚えています。一度揺れがおさまったときにビル全体に「みなさん逃げましょう」というアナウンスがあり、僕もスタッフと一緒に外に逃げました。外に出た途端に二度目の強い揺れが起きて、ビル自体が揺れている様子を見て、身の危険を感じました。その後オフィスに戻ると、部屋の中は崩れた荷物で足の踏み場もありませんでした。隣の会社のオフィスはまだましな状況だったので、そちらに移って、そのビルに残った人たちと一緒に、次の日の朝まで過ごしました。

A 帰らずに職場に残ったんですね。ありがとうございます。では T さんお願いします。

T 私は大塚の会社にいました。地震が起きた

時、ちょうど立ってプリンターのトナー交換をしていました。すごい揺れだったので、そばにある本棚の本が崩れ落ちてくるかもしれないと思いとっさに棚を押さえました。妙に長い地震だなと思い、とりあえずおさまった時に席に戻って、即インターネットで地震情報を調べました。二度目の揺れが来て、これは危険だと会社の外に出ました。他の家からも人が出てきていました。その時はまだ地震の規模は認識していませんでした。その後、また社内の自分の席に戻ってパソコンでニュースを確認していたのですが、そこで大変なことだと知りました。パソコンメールと固定電話は通じましたが、携帯は通じず、仕事で会う予定だった方とも連絡がとれませんでした。16 時過ぎに池袋の自宅に歩いて帰りました。その時見たのは、道路が山ほどの人で埋まっている光景でした。その日は、帰宅できない会社の人を二人自宅に泊めて、テレビとインターネットを見ながら夜遅くまで起きてました。

A 仕事で社内にいる方が多くいた時間帯でしたね。O さんはどんな状況で地震にあいましたか。

O 私は阿佐ヶ谷に勤務していて、オフィスで地震にあったときは、大したことはないと思っていました。でも主任が「逃げろ」と声を上げたので、階段を下りていたところ、いよいよ揺れがひどくなりました。オフィスが線路脇のビルだったため、線路の崩壊や他のビルが崩れてくることを心配して、一階でしばらく待機していました。おさまってから外に出たんですが、二度目の強い揺れの時にビルがバナナ状になっていたり、窓ガラスが割れそうになって歪んでのを見たり、車が液状化している道路の上で踊っているように走っているのを目の当たりにして、すごく怖かったのを覚えています。その時に近所の人たちも出てきて、周りの人たちと声をかけあう場面もありました。その後会社に戻ると、会社の役員で阪神淡路大震災を経験した方が、自分の体験から、すぐ食糧や寝具の確保を指示しました。みんなで近くの商店街

に走ったんですが、地震から一時間以内のうちに、すでに寝具は売り切れていました。なんとかお弁当など食糧を確保して会社にもどってから、マグニチュード 8.8 の大地震だと知りました。その日は、むやみに移動するのは危険だと会社が判断し、社員のほぼ全員が社内で一夜を過ごしました。

A あえて帰宅を控えるよう指示した会社もあったんですね。

私自身は地震の時、会社の用で外出していました。有楽町の交差点で信号待ちをしていたんですが、最初あまり揺れに気づきませんでした。横断歩道を渡り終えると揺れが強くなり、街を行き交う人たちが騒然としました。右頭上に走っていた山手線がものすごい音で緊急停止するのを見たり、ビルがくねくね曲がるのを見て、こんなところで死ぬのかなと恐怖を覚え、現実を冷静に受け止めなければと必死でした。揺れがおさまってから会社に戻り、上司が不在だったため、自主的に社員みんなで帝国ホテルに避難しました。途中、飲食街のカフェでテレビを外に向け情報を流していたので、その画面から地震や津波の尋常でない状況を知りました。ホテルには宿泊客や避難者でロビーや廊下まで、ものすごい人であふれていました。公衆電話は大行列。その日は、しばらく帝国ホテルで待機し、帰宅できない同僚を連れて銀座から杉並の自宅まで 18 時頃から 3 時間半かけて帰りました。日比谷公園周辺、四谷や新宿など途中通過する各駅は人の海でした。

◆「3.11」を境に何が変わったのか

A みなさんそれぞれの場所で 3.11 にあい、不安・恐怖を少なからず感じてあの日過ごしたと思います。そしてその後、地震の甚大な被害とともに、原発事故に関して知ることになるわけですが、原発事故を含め、3.11 を経験したことで生まれた思い、考え、実際に行動に移したことがあればお話いただきたいと思います。

M 地震はショッキングな出来事でした。あの日から一週間くらい電車もまともに動いていなかったし、会社にはスタッフを集めること

も困難でした。でも実際は一週間経つ 23 区内だったため停電もなかったし、生活は普通にできていたんですよ。ただ仲間は被災地の近くに住んでいて、その地域は停電が続いていたし、近しい人たちが何ヶ月も非常事態が続くような状況に陥ったことは初めてだったので、やっぱり「なんかしなきゃいけない」と思いました。だから初めて義援金を寄付したし、その頃エコロジーサイトに関する仕事をしていたので何か被災地のためになることはないか考えたりしました。そういう生活を送りながら、とにかく何か異常な事態が起きているんだなということを初めて実感した気がします。

原発に関しては、緊急ニュースで当時の官房長官の枝野氏が原発事故について伝えるドタバタした様子を見て、ただ事じゃないなという危機感を持ちました。でも何が正しい情報なのかが全く分からない状態が続いたので、その後しばらく経って落ち着いてから、原発について少し考えるようになりました。それから、大変な原発事故について、何かできることはないかと考えるようになり、原発再稼働反対のデモに初めて参加しました。

ただ、その後に行われた去年の夏の衆議院選挙で、自民党が圧勝した結果を見ると、民主党がつくったわけでもない原発に対して責任をとらされた形で解散し、その後自民党が支持を拡大するという選挙結果がどうにも納得がいきませんでした。そのことに影響されて、最近始めたことがあります。それがネットラジオです。ニュースが、テレビと新聞で報じられるものが正しくて、ネットで流されるものは正しくないといく多くの人が思っていること、そしてネットでいくら持論を叫んでも影響力がないということをこの 2 年間でよく分かりました。そうなのであれば、自分でメディアをつくろうと思ったんです。責任をもって顔を出して自分の考えを発言する場を設けて、正しいか正しくないかは聴いているみんなが判断する。ニュースとは正しいものであって、自分たちが正しいと思うニュース—それはインターネットに雑多に流れるいい加減な内容のものとは区別される—信用できるニュースを提供できるのではないかと考えてユーストリームで配信しています。福島第一

原発事故について、今後まともな情報が提供されとも思えないし、福島の人たちが故郷に再び帰るということも、これから実現されるか分からない状況下で、今ある国内の原発を全て停止して、今ある原発政策を反転させることにつながるよう、ネットラジオを活用していきたいと考えています。

A やはり、何か行動に移すことを思い立たせる大きな出来事だったと言えますね。T さんいかがですか。

T 私は数日間、パソコンの前にかじりつき、長時間かけて情報収集をしていました。インターネットで得た情報を翌日の新聞で確認するというやり方です。テレビはおろかさの確認のためにつけていました。今、地震の起きた 11 日が金曜日で、その後の土日は原発が一番深刻な状態だったと分かっています。そんな時に、何の情報提供もしない国の恐さを、身をもって感じました。地震速報や新聞、個人のツイッターやブログ、また画像や音声まであらゆる情報を集めました。私はその作業を通して、この東日本大震災と福島第一原発事故が、この国の根っこにある問題をすべて内包していると確信しました。もちろん日々の生活—仕事や HuRP の活動の中でも、国のあり方について、強い関心をもって生きてきたつもりだったけれど、こういう形でその問題点を知らしめられるのか…ということが一番の衝撃でした。

しばらく経ってから生まれた思いとしては、自分含め都会の生活が、いかにいびつなシステムの上に成り立ってきたか、過疎地、高齢者の多い経済的に豊かでない地域に犠牲払わせてきたかということ、そして原発については、被爆の恐れがあっても情報を流さない国の方針など、それらについてどれだけ無関心だったかという自覚でした。また、3.11 の経験を放っては生きられないとも思いました。でも、きっと周りも自分もこの経験を忘れていくだろうことも予期できました。であれば、自分のものとして、この経験を咀嚼して自分の視点として活かしていくしかないと思いました。具体的には、デモに参加し、被災地ボランティアに行きました。今 2 年が経過して、3.11 を取り巻く問題が「人のいのち」の問題だったということと、自分は今ま

で個々の社会問題について賛否を表明していたけど、それら全てに内在する根本的な問題は同じで、それは経済主義と自己責任論に因ると思ったんです。だから、3.11 を経験したことで、私は自分の行動指針をはっきりさせられたと言えます。

O 私は震災翌日に入稿しなくてはならない仕事をかかえていたため、とにかく仕事をこなさなくては、という状況でした。身の危険よりも仕事を優先させていました。その後、友人からのメールで放射能の危険性を知り、レインコートを買って、何度か来て出かけました。ただ、仕事に追われていたので、放射能の危険を気にするよりも、死ぬときは死ぬし、地震が起きてもなんとか生きながらえたのだから、いつも通りの生活をしようと思い、なかば現実逃避するように仕事をしていました。会社の役員の方が阪神淡路大震災を経験していたということもあり、社員が被災地へボランティアに向かいました。ふとんやタオルを被災地に送ることもしました。でもその時から考えていたのは、震災直後はボランティアや支援物資もたくさん集まるし、世界中からの協力もあるだろうけど、2 年 3 年先まではとても続かないだろうということです。だから、少しずつでも途切れず現地に義援金を送り続けたいという気持ちが生まれました。現に、義援金は震災直後の 3~4% しか集まっていないそうです。仮設住宅で暮らす人も、屋根があるだけでいいとは言えないと思うし、原発事故が起きたことで住んでいる場所から逃げたいと思う方でも、お金がなくてできない人もいます。東日本大震災の後に、竜巻の被害にあって、せっかくの義援金もその竜巻にもっていかれたという人がいるという話も聞きました。だから私は、阪神淡路大震災後に完全な復興まで 10 年かかったということもふまえ、東北が完全に復興するまで、特に教育系の団体への寄付を行っているのですが、SNS などを活用して出来る限り募金活動を呼びかけていきたいと思っています。

A 私も O さんと同じく、仕事に追われ、身の危険よりも目の前の業務に執着していました。家族とは、死ぬときは死ぬんだからできる備えをして生活するしかないという話になり、家では窓を開けないようにしたり、防災

グッズや避難場所の再確認などをしました。その後はテレビやネット、友人との情報交換で原発事故について状況把握をするようにしていました。それからしばらくして、HuRPのみなさんと再会したんですが、そこで東日本大震災や原発事故について話をし、自分たちの経験として 3.11 を語るなら、やはり現地に行くべきだということになりました。そこで名取市のボランティアセンターを訪れ、被災家屋の庭の泥だしをお手伝いしたことは、その後、再度ボランティアに行くきっかけになりました。私は正直、最初の被災地訪問では興味本位なところがありました。もちろんひやかしでははく、被災地がどんな状況で、実質的に被災地で何か自分にできることはあるのか知りたかった。実際に被災地ボランティアに参加して、これはそう簡単に終わる作業ではないし、長期的に人手が必要になるだろうと思いました。だから行ける時にまた被災地ボランティアに出かけようと思い、震災後の夏、会社の後輩と仙台の津波被害を受けた地区に行きました。そこでは民間のボランティアセンターを介して個人のお宅に行き、ビニールハウス再建のために必要な金具の清掃を手伝いました。そこで痛感したのは「ボランティア側の自己満足ではなく、被災地や被災者が必要とする支援が何なのか、それを実現できているのか」という視点の重要性です。3.11 から 2 年経ち、津波の被害を受けた地域は、未だに畑の泥だし作業が必要だそうです。私が仙台でボランティアに訪れたお宅は、もとの生活を取り戻しつつあるそうですが、そのことをこの目で確認するためにも、まだボランティアを必要とする場所で手伝えるためにも、今年必ず被災地を訪問したいと思っています。

◆ HuRP の活動「3.11 とこれから」

A みなさん「3.11」を経験したことをきっかけに、具体的な行動に移したり、それを続けている方もいるようですが、具体的に HuRP の活動としてやっていきたいことはありますか。

T 私は、福島に住む人には、どうにかして福島を出て、原発から離れるべきだと思っているし、それが簡単にできないことも分かっています。それは経済的問題や家庭の事情からかもしれない。できれば逃げてほしいしけ

れど、まずは今福島にいる人の話を聞いたり、現状を見て知ったり、その言葉を社会に知らせたりすることを、どう実現していこうか考えています。一番圧殺されている福島の声を、これ以上溜めてはいけないと思うんです。知るということは全ての第一歩だと思います。福島にいる彼らが何を考え、何を必要としているのか、その言葉を知り、知らせたいと思っています。福島の人を目の前に、何を言えるか、何を協力できるか、そういう議論に入りたい。その一歩を踏み出すべく具体的な活動を HuRP で行っていきたいですね。

A そのとおりですね。福島の人声を聞くためにも、被災地ボランティアを今年中に企画したいと思います。これまでも被爆と被曝に関して、肥田舜太郎先生の著書を通して勉強会も行いました。被災地や原発事故の現状を知り、3.11 の経験を風化させないために 3.11 に関する企画や活動を継続し、いずれ HuRP 出版でブックレットにまとめたいと思いますね。それぞれの 3.11 の体験から、これからの HuRP の活動指針が浮かび上がるような有意義な意見交換ができたと思います。みなさん、ありがとうございました。

3.11 への視点：文献一覧

●「3.11」の記録

・金菱清（編）『3.11 慟哭の記録』新曜社（2012/2/23）2940 円

・日本経済新聞社・編集局写真部『記憶 忘れてはいけないこと 1～4』（2011～）電子書籍版 500 円英訳付

・安田菜津紀、渋谷敦志、佐藤慧『ファインダー越しの 3.11』原書房（2011/12/1）1575 円

●原発事故・被曝問題

・肥田舜太郎、大久保賢一『肥田舜太郎が語る「いま、どうしても伝えておきたいこと」：内部被曝とたたかい、自らのいのちを生かすために』日本評論社（2013/2/5）1470 円

・小出裕章、後藤政志、石橋克彦、孫正義『意見陳述：2011 年 5 月 23 日参議院行政監視委員会会議録』亜紀書房（2011/12/6）1575 円

・児玉龍彦『内部被曝の真実（幻冬舎新書）』幻冬舎（2011/9/8）756 円

・堀江邦夫『原発ジプシー 増補改訂版：被曝下請け労働者の記録』現代書館（2011/5/25）2100 円

・肥田舜太郎、鎌仲ひとみ『内部被曝の脅威 ちくま新書(541)』筑摩書房（2005/6/6）756 円

・こうの史代『夕風の街桜の国』双葉社アクションコミックス（2004/10/12）840 円

・肥田舜太郎、林京子『ヒロシマを生きのびて：被爆医師の戦後史（シリーズ 時代を創る人びと）』あけび書房（2004/02）2100 円

・肥田舜太郎『ヒロシマ・ナガサキを世界へ：被爆医師の反核語り部世界行脚』あけび書房（1991/06）1529 円

・萩尾望都『なのはな』小学館（2012/3/7）1200 円

・ステファニー・クック、池澤夏樹、藤井留美（訳）『原子力 その隠蔽された真実 人の手に負えない核エネルギーの 70 年史』飛鳥新社（2011/11/11）2415 円

●「3.11」をどう考えるか

・森英樹・白藤博行・愛敬浩二（編）『3・11 と憲法』日本評論社（2012/3/5）1995 円

・水島朝穂『東日本大震災と憲法：この国への直言（早稲田大学ブックレット）〈「震災後」に考える〉』早稲田大学出版部（2012/2/25）987 円

・江川紹子ほか、小森陽一（編）『3.11 を生きのびる：憲法が息づく日本へ』かもがわ出版（2011/9/1）1785 円

・小出裕章『小出裕章 原発と憲法 9 条』遊絲社（2012/1/24）1470 円

・片山善博・津久井進『災害復興とそのミッション：復興と憲法』クリエイツかもがわ（2007/8/23）2100 円

■ボランティアへ赴いた被災地はいま―編集後記にかえて■

2011 年 8 月、2 度目の被災地ボランティアに出かけた時に訪れた仙台津波復興支援センターに、「3.11」から 2 年が経とうとする 3 月上旬、電話で話を聞いた。

現在も、津波の被害を受けた蒲生地区周辺で、畑の泥出し（がれき撤去）の作業が続けられ、一日平均 10 人のボランティアが被災者宅を手伝っているそうだ。この 2 年間で、当センターでボランティアに参加した人は、のべ 2 万 6000 人とのこと。全国各地から訪れ、リピーターも多いという。また、支援物資の搬送のため船を出す漁師さんが、冷え込む海の上で使用するホッカイロなどは、今後も引き続き必要となるものなので、送ると喜ばれるそうだ。

私が当センターを介して清掃作業を手伝った E さんのお宅は、津波で全壊した。それが今年、完全に建替えられた様子がボランティアセンターのブログに掲載されていたのを見つけた私は、必要なボランティアが引き続き行われているのであれば、E さんとの再会を果たすためにも、今年必ず、当センターへボランティアに訪れる旨を伝え、電話を切った。（望）